慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	米國近世史, 木村重治譯
Sub Title	
Author	山口, 昌(Yamaguchi, Akira)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.2 (1924. 8) ,p.177(338)- 178(339)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240800-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の承安五年の國宣以下十數の古文書寫眞を掲げ、卷末には須々神社略圖一枚を附してゐる。次に本文の目次をかゝげると、

一社號、二鎭座地、三社格、四創建、五祭神、六宮寺、七社領八造營、九神職家、十祭祀、十一氏子又び崇敬者、十二附記（寶物等）

右の十二項にして、猶同社古文書集、緣起、鐘閣を附錄として居る。右の古文書集には承安五年二月廿八日の國宣、文治二年八月日解狀以下七十一の古文書を記載してゐるが、こは同社の神威と尊敬とを語る貴重なる資料である。最近各地神社の其社誌等を編纂せらるゝやうになつた事は我等の常に喜んでゐる處である。

（大正十三年五月十日　武田勝藏）

新選俳諧年表（平林鳳二・大西一外著）

本書は文龜元年より大正十二年に至る四百十三年間に於ける著名の俳人七千餘名の傳記事蹟其他の事柄を年次的に摘抉略記したものである。猶沒年の詳かならざるはいろは別として、俳家人名錄と題しこれを卷尾に一括してある。俳人は勿論歷史家文學者の座右に備ふべきものである。

（大正十三年二月廿一日武田勝藏）

米國近世史（木村重治譯・國民圖書株式會社發行）

ある國とその國民とを理解せんがための捷徑はその國の歷史を研究するを以て第一となすべきである。我國とアメリカ合衆國との關係は年代から云へば左程古いものではないが、これによつて兩國が蒙りたる影響は甚大である。然も密接なる關係を有する兩國民が如何なる程度まで互によく理解し會てゐるかは甚しき疑問である。米國人の多くは未だに日本を詩の國夢の國と考へ或は日本人を野蠻人視し軍國主義的侵略的國民と考へてゐる。而して一方日本人に於ても亦米國の國民性や米國の政治組織や產業等に對して充分なる理解を有するものが稀少である。斯の如き現狀に在つては兩國民の間に完全なる友宜を增進することは到底不可能と云はなければならない。合衆國は既に排日法を制定して向後日本移民の入國を禁止したがため、これによつて最早兩國の間に從來の如き密接なる關係は斷絕したと考へてはならぬ、寧ろ兩國の國交は今後益々多事にして更に一層重大なる關係を生ずるに至るに相違ない。然るに我國內には米國史を研究し米國の國情を眞によく理解してゐるものゝ少いのは一個の不可思議と云はなければならぬ。かゝる時に際して本書が譯出せられたのは最も意義あることゝして深く喜ばざるを得ないのである。

著者は序文に於て「本書の目的は現代の我國を知らんと欲する讀者の要求を充すことにある。故に余は特に社會及產業の問題に就て詳述したされどまた其の方面にのみ偏することなからんことに注意した」とて政治史にも重きを置きたる旨を述べてゐる如く本書は南北戰爭終結後の政治社會の狀態より筆を起し巴里講和會議に至る約半世紀間の米國史の諸相を叙述的に書いたものである。

南北戰爭を以て全米國史の一轉期とするならば同戰爭以後に於ける米國は再生せる米國と云はなければならない。産業の隆盛大企業の勃興大ツラストの發生等は政界に大なる波紋を産み、兩大政黨を中心として利害の岐るゝ處に從つて樣々なる紛糾と混亂とを惹起し進歩と腐敗とを織り混ぜたる現代社會を形成する過程をなしてゐる。更に西部未開地の開發と大陸横斷鐵道の完成とは米國の産業界に一大刺戟を與えこれより米國は從來の孤立的境地を脱し漸次對外的に發展する傾向を採り些々たる口實のもとに西班牙との戰爭を行ひフヒリツピン群島を獲て東洋に飛躍すべき根據地となしパナマ運河の開鑿によつて東西兩太洋の連絡を便ならしめ併て國防上の一大威力を加えた。斯して國家の基礎を堅固にしたる後世界大戰の勃發するに及んで正義人道の大旆を翳して參戰し「アメリカ第一」の標語の下に國威を世界に發揚することを得た。著者は以上の歷史的過程を二十四章に亘つて極めて平易に而して又極めて親切に説明してゐる。

本書は米國史の概念を得んと欲する初學者に最も丁寧なる手引きとして推賞するに足る價値を有するものと思ふ。（山口昌）

The Racial History of Man, New York.

By **Roland B. Dixon**

1923. XVi, 583 pp.

本著は人種體型特に頭形（頭蓋長幅、並に幅高率）鼻形（鼻長幅率）に基き人種の矩準體型を定め、人類間にありて、各々類緣を示すものと、示さゞるものと區別分類し、地理的分布等を考察し、以て全人類の歷史を論究せるものにして、其研究方法たるや在來の方法とは全然其趣を異にし、在來の歷史、古來の學説を排し、只測定により表示されたる結果に憑りて其論結を索めたものである。序文の冒頭に明記せられたる通り本書は主として新しき試みである。

體型の矩準として何故に以上の三點を撰び他を捨てたるかの理由に就ては詳數説明がある、爾來人體の測定に關するものは徒らに徵に入り細に入り、比較研究をするにしても實際使用せざるものが澤山にある、今著者の撰びたる矩準は殆んど如何なる人類學でも必ず測定するものであり、然して比較研究上最も信頼し得べきものと認められて居るものである、實施に比較研究を試みたる者にして初めて著者が僅かに以上の三點を矩準とせる事に深く共鳴し得るのである、然し著者が特に三點を撰びたる事に關しては書中詳數其理由を述べてある、實際、人類の分類は區々にして其間に一貫せる適確なる矩準が無く、折角無數の測定や研究が有ても煩雜の度を增すのみであつて Synthesis を缺いて居つた感じを禁じ得なかつた。著者の私信にある如く「世間には色々の批評をする人があらう」けれ共此書によりて始めて全人類分類上に一種の矩準を得たと云ひ得る。此意味に於て此書は獨特のものであり、頗る有意義だと考へる。書中讀者をして首肯せしむる所が多い。

全文五百八十三頁の可成の大册であり、全世界に亘つて材料の蒐集に勞力を惜まざりし事は一見して感知される、書中吾人の肯